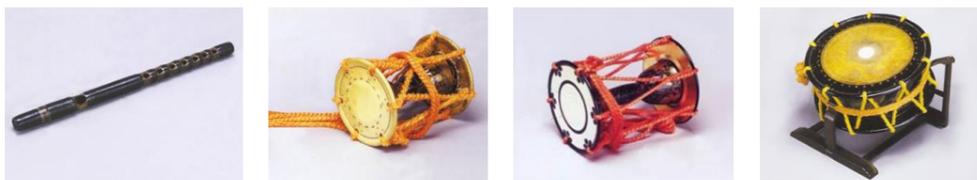


囃子

能管(笛)、小鼓、大鼓、太鼓の四つで構成され、四拍子と呼ばれています。能の囃子は、三つの打楽器に加え、旋律楽器の能管もリズム主体の演奏を行います。単なる伴奏ではなく、役者と対等にわたりあい、緊張感のある舞台を作りあげる重要な音楽です。



ふえ 笛 おおつづみ 大鼓 こつづみ 小鼓 たいこ 太鼓

能面

能面にはとても重要な働きがあります。種類は約60種類と言われ、この世の存在ではない鬼神や怨霊などの役柄の面の他、さまざまな年齢層の女性の面が多くありますが、これは男性の役者が、女性の年齢に応じた美しさを演じるためだと考えられています。



こおもて 小面 ふかい 深井 みかづき 三日月 しかみ 顰 しょうじょう 猩々 はんにや 般若

扇

扇には二つの種類があります。「鎮め扇」は通常使うものです。「中啓」は親骨が要よりも外側に反った形をしており、折りたたんだ時上端が広がります。扇には様々な装飾が描かれています。



かみおうぎ 神扇 しゅうろうぎ 修羅扇 かつらおうぎ 鬘扇 きょうじょうぎ 狂女扇 おにおうぎ 鬼扇

能装束

能装束は能の精神性と内容を視覚的に表現しています。絹を主な素材とし、多くの装束は重厚な仕立てになっています。精巧で複雑な文様や色調があり、多様性があります。



からおり 唐織 あつた 厚板 かりぎぬ 狩衣 ちょうじけん 長絹

鶴亀座

さくら学園 能楽体験教室

Sakura Gakuen Gold Coast
Japanese & Culture School
in Australia



2016年3月19日(土)

ロビーナ州立高校 語学ルーム



NPO法人 能楽普及集団

鶴亀座

能楽とは

のうがく
笛や鼓による伴奏と、地謡と呼ばれるコーラス隊の謡（歌）に合わせて、舞台上の役者が舞いながら古典文学を題材とした物語を進めて行く演劇です。役者は装束を着けて、主役は主に能面をかけています。

のうがく やく ねんまゑ にほん つく せかいむけいぶんかいさん
能楽は、約650年前に日本で創られ、ユネスコの世界無形文化遺産となっています。

素謡

のういっきよく だいほん はやし まい い うた てぜんいん ぶたいじょう せいざ うた
能一曲の台本を、囃子や舞は入れずに、謡い手全員が舞台上で正座して謡う
かたち うたい ものがたり すす い えんげき やくしや しょうぞく つ しゅやく おも のうめん
形をとります。謡は、物語のセリフに節（音程）と拍子（リズム）をつけて
うた かた
謡ったり、語ったりします。

仕舞

のういっきよく み ぼ ぶぶん のうめん のうしょうぞく はやし ともな ま て すうにん
能一曲の見せ場となる部分を、能面、能装束、囃子方を伴わずに、舞い手と数人
の地謡のみで行います。紋付きと、はかまを着用します。

舞囃子

のういっきよく み ぼ ぶぶん ま て じうたい はやしかた ひろう のうめん
能一曲の見せ場となる部分を、舞い手、地謡、囃子方が披露するもので、能面、
のうしょうぞく つ もんつ ちやくよう
能装束は付けずに紋付きと、はかまを着用します。

附祝言

いちにち こうえん お さい うたい うた ひ し
一日の公演を終える際に、おめでたい謡を謡うことでその日の締めくくりとするもの。



曲目の紹介(あらすじ)

三井寺

あき ころ きょうと きよみずでら きよみ せき しずおかけん き おんな かのんさま むか おっしん いの
秋の頃、京都・清水寺にて、清見が関（静岡県）から来た女が、観音様に向かい熱心に祈りをささげてい
ました。彼女は、わが子の千満が行方不明になったため、再び逢いたい一心で、都までお参りに来ました。
いの あいだ にしばし だろんだ 女は、 霊夢を見ます。そこに、 清水寺門前の者が来て夢を 占い、わが子に逢
いたいなら近江国（滋賀県）の三井寺へ急いで行きなさいというお告げだと判定します。女は喜び、さっ
そく三井寺へ向かいます。
みいでら ちゅうしゅう めいげつ そう かんしょう なか でら そう でし い せんみつ
三井寺では、中秋の名月を僧たちが観賞をしており、その中にお寺の僧に弟子入りした千満がいました。
せんみつ はは みいでら しょうろう あらわ かね おんな ぶっぽう と おんな き なに
千満の母が三井寺の鐘楼に現れ、鐘をついたり、鐘と月との縁としての仏法を説きます。女を見て何か
かん せんみつ おんな しゅっしんち き こえ おんな せんみつ たが ぼし みと あ なみだ たいめん はた
を感じた千満は、女の出身地を聞き、声をかけます。女と千満は互いに母子だと認め合い、涙の対面を果
たします。そして二人は故郷へ連れ立って帰り、豊かに暮らします。

船弁慶

へいけつじとう こうせき みなもとよしつね あに みなもとのよりとも ぎわく も かまくら
平家追討に功績をあげた源義経でしたが、兄の源頼朝に疑惑を持たれ、鎌倉
かた お み よしつね べんけい ちゅうじつ じゅうしや さいごく のが
方から追われる身となります。義経は、弁慶や忠実な従者とともに西国へ逃れ
せつ つ くに ひょうごけん だいちつ うら とうちやく よしつね あいじん しずか いっこう
ようと、摂津の国（兵庫県）大物の浦へ到着します。義経の愛人である静も一行
に 伴って同道していましたが、女の身で困難な道のりをこれ以上進むことは
むずか みやこ もと わか うたげ せき しずか まい ま よしつね
難しく、都に戻ることにになりました。別れの宴の席で、静は舞を舞い、義経
みらい いの さいかい ねが なみだ みおく
の未来を祈り、再会を願いながら涙にくれて見送ります。
しずか わか お しゅっぽつ せき よしつね べんけい ごういん ふなで めい
静との別れを惜しみ、出発をためらう義経に、弁慶は強引に船出を命じます。
すると、船が海上に出るや否や、突然暴風に見舞われ、波の上に、壇ノ浦（山口県）
めつぼう へいけいちもん そうだいしょう たいらのともり ぼうれい あらわ ともり おんりょう ぜ ひ よしつね
で滅亡した平家一門の総大将であった平知盛の亡霊が現れました。知盛の怨霊は、是が非でも義経を
かいてい しず なぎなた ふ おそ かか べんけい じゅず ひっし ごだいせんみょうおう きとう
海底に沈めようと、長刀を振りかざして襲い掛かります。弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈祷し
ます。その祈りの力によって、怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、白波ばかりが残りました。



羽衣

はる ひ りょうし み お しずおかけん まつばら とお まつ き よ みごと
ある春の日、漁師が三保（静岡県）の松原を通りかかると、松の木に世にも見事
な羽衣が掛っています。持ち帰って家の宝にしようと漁師は思いました。そこ
でんによ あらわ わたし かわ ほ い
へ天女が現れ、それは私のものだから返して欲しいと言います。
りょうし は、はじめこそこぼんでいましたが、その羽衣がないと天に帰れないとなげ
く天女の姿に打たれ、衣を返すことにしました。羽衣を返す代わりに、天人の
まい み てんによ よろこ ひ う
舞を見せてほしいと言うと、天女は喜んで引き受けます。
ころも う てんち しゅくふく うつく まい ま てんによ つき
衣を受けとって、天地を祝福するような美しい舞を舞うと、天女は月の
みやこ かわ い
都に帰って行きます。



土蜘蛛

おも やまい なや ぶしょう みなもとのらいこう じじょ せ わ おんな こちょう くすり とど よる ふ らいこう
重い病に悩む武將の源頼光のもとに、侍女（世話する女）の胡蝶が薬を届けた。その夜、伏せる頼光の
まくらべ み し そう たず らいこう ようたい そう しょうたい あや とたん ちすじ いと な
枕辺に、見知らぬ僧が訪ねます。頼光の容態をうかがう僧はその正体を怪しめた途端に千筋の糸を投げ
かけ、化け物（土蜘蛛の精）の本性を現します。頼光も枕元にあった刀を手にとって斬りつけますが、
ば もの すがた け
化け物は姿を消してしまいます。
か ひとりむしや らいこう はなし き いて のこ ち あと ぼ ものたいじ
そこに駆けつけた独武者は、頼光から話のいきさつを聞いて、残された血の跡をたどって、化け物退治に
む 向かうこととなります。

本日の番組

れんぎん	しかいなみ
連吟	四海波
かいせつ	のうがく
解説	能楽について
すうたい	みいでら
素謡	三井寺
しまい	ふなべんけい
仕舞	船弁慶
まいばやし	はごろも
舞囃子	羽衣
たいげん	こつづみ
体験	小鼓
	たいこ
	太鼓
	おもて
	面
かんしょう	つちぐも
観賞	土蜘蛛
つけしゅうげん	しょうじょう
附祝言	猩々